

2009年に茨城大学を定年退職した十河は、これから益々旺盛に作品を制作し、発表していくのであろう。退職がスタートとすれば、十河は新人ということになる。十河は新人に相応しく、ステップスギャラリーで既に二人展一度、個展一度を開催している。私は日程を間違えて個展に接することが出来なかったため、今回の展覧会に対して待ち遠しい日々を送ったことになる。



《我等は祖国のコマーシャルソングを唄う》は、立体作品である。決してユーモラスではなく邪悪に満ちたフィギュアは、昭和天皇の口癖「アッソウ」で総ての贖罪を洗い流す。

入口左と事務所の壁面を多い尽くす50枚程のペナントによるインスタレーション《我等は祖国のコマーシャルソングを唄う》には企業の名前が記されている。ここにあるのは企業へのルサンチマンではない。企業の呼称が我々を呪っているのである。我々は、個々を名称する神ではなかったことに気が付かなければならない。



今回、十河は四種類の作品を出品した。まず一つ目は入口横に設置した《笑うと死刑 笑わないと終身刑》である。見る者はどちらにしても受刑することになると考えがちだが、実は受刑者は作品であると私は解釈する。この作品が持つフォルムは、人間そのものだ。

続いて強大な屏風上の作品《しりとりに歌》である(下部写真)。ソニー、ニッポン、トヨタと謳いあげ、円、否定、蟻と反歌を加える。蝦、玉子、マグロといった毒々しい色彩の寿司ネタは、江戸前よりも海外におけるステレオタイプを想起させる。我々が此処にいて、逃れられない現実を付き付けられているように感じる。バブル経済崩壊は国内の問題であって、大東亜共栄圏が生み出した幻想は、時代を超えて世界の地上を循環しているのである。



受刑者、幻想、世間、神への否定という作品群が結合すると、そこには我々の自画像が立ち現れる。ここに美醜という対立概念は存在しない。あるのは唯、剥き出しの現在の日本人の平均的な顔付きに過ぎない。そこに最悪の歴史が込められていることに目を背ける訳にはいかないのだ。十河や見る者が訴えるのではなく、作品が知らしめる警告に、我々はどのように対処すべきなのか。この警告には、美術という危うい存在に対するものも含まれている。

